

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04763

研究課題名（和文）生活科及び総合的な学習における教師の「観」の転回を促す省察的実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a reflective practice model that encourages teacher's perspective to change their in life sciences and comprehensive learning

研究代表者

畔上 一康（Azegami, Kazuyasu）

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：70778034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生活科及び総合的な学習における主体的学習の具現化に向けて、デューイの教育思想の系譜にある長野県下の総合学習の実践について、複数の事例の臨床分析に基づき、教師の「観」の転回を促す省察的実践について考察した。その中で、実践における省察の深化は教師の「観」に基づくアプローチの違いによるところが大きく、技法に焦点化した授業では授業改善は起こりにくく、子どもの事実に対して対話的な授業を展開している教師の場合には、授業自体を再構成しながら発展させることができると考察した。今後、バフチンの対話的授業論の観点から実践の分析を通して、教師の省察の深化過程について明らかにできるのではないかと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の独創性としてデューイの思想を起源とする実践について教師の観に着目した省察的実践として分析検討することは本研究が初めてである。予想外の事態における教師の判断、行為が授業の質や学習効果に大きな影響を及ぼす生活科及び総合的な学習の特性を、教師の省察的思考を育成する有効な場と捉える点が本研究の革新性と言える。指導要領が示す主体的対話的な深い学び「具現化に向けては教師の指導観の变革が重要なり、省察の視点からのアプローチは新たな視点と言える。複数の事例から省察の有効性を確認してきている。この点から、生活科や総合的な学習に限らず、学級崩壊や教師の再生等の教育現場が抱える課題解決に寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）： This study considered that reflective practice could encourage a continuous evolution in a teacher's perspective, based on multiple cases' clinical analysis. The realization of Nagano prefecture's integrated studies, which was heavily influenced by Dewey's teachings, also shapes the proactive learning models applied in life and integrated studies. To further practice reflection, a teacher's "perspective" highly depends on the way they make approaches in classes. It would be possible to reconstruct and further develop classes if teachers make the classes more interactive based on the children's needs, instead of focusing only on technical aspects, which would in turn, impede any improvement.

By analysing from the point of view of Bakhtin's theory on interactive lessons, there is a possibility to make the development process of the teacher's reflective practice more apparent in the future.

研究分野：教師教育学

キーワード：省察的実践 教師の観 対話的授業

1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

(1). 教育現場における省察にかかわる現状と課題

これまで科学的合理性に基づく技術と知識の習得に焦点が当てられてきた教師教育は、「省察」概念によって、教師自身の自律的な思考の育成へと焦点が移行してきている。教師の実践知は「経験にひらかれた動く知」(塚本明子, 2008)¹として捉え直され、教師として生きる指向は、これを「どう持つか to have」から、指向する主体として「どう在るか to be」(エーリッヒ・フロム, 1976)²へと大きく転回した。これを受けて、教師研修や授業研究のあり方は問い直され、実践に反映されるべきものであるが、「反省できるが省察できない」と遠藤³が指摘するように、教育現場では、その意義が十分に理解されず、必ずしも実践の改善につながらない現状が見られた。このことから、子どもの主体的協働的学習の具現化に向けて、子どもと共に教師が成長する真正の省察的实践モデルの開発はその基盤を為すものと考えた。

(2) 「研究学級」の系譜にある実践への着目

長野県師範学校附属小学校の「研究学級」の実践(1917-1937)は、シヨーンの「省察的实践」(D.Schön 1983)の論考⁴の思想的基盤とされるデューイ(J.Dewey)の教育哲学を背景に、Learning by doingの方法原理のもと、《郊外》を主な学びの場として展開された。この実践は新たな学習のあり方の探究であると同時に、子どもの事実に自らの在り様を問い続ける教師(省察的实践家)への変革を指向した試みと捉えることができる。「研究学級」の実践は、その後長野県下各地で展開された総合学習の起源とされ、生活科創設に大きな影響を与えた。実践者の一人牛山榮世(1944-2012)は、総合学習における教師は子どもと共に探究する存在であり、その過程における「教師の体」の様相が子どもの学びの深まりにかかわることを指摘⁵した。しかし当概念に象徴される実践知は、これまで現象的側面から検討されることはなかった。そこで、教師の省察を視点に、シヨーンの論考、コルトハーヘンのonionモデル(2005)⁶、マネンの示す省察レベル(1977)⁷を援用して実践を分析することで、「研究学級」以来実践者の中で口伝的に引き継がれてきた実践知は、省察的实践の原理的知見として意味づけ直される可能性を有していると考えた。

2. 研究の目的

本研究は4年の期間内で、次の2点の研究課題としてすすめてきた。

「研究学級」及びその系譜にある実践は、省察的实践としてどのように観ることができるかを明らかにする。

長野県師範学校附属小学校の「研究学級」の実践にかかわる資料文献、その後生活科教科書編集で集積された実践資料について、デューイの教育観とシヨーンの論考との関連から、またコルトハーヘン、マネンの概念モデルを援用した分析に基づき、「研究学級」の系譜にある実践理念とその実際を、省察的实践の視点から検討考察し思想的枠組を明らかにする。

実践場面においてどのような省察を通して教師の「観」が転回するかを明らかにする。

¹ 塚本明子(2008)『動く知フロネーシス』ゆみる出版、

² エーリッヒ・フロム(1976)『生きるということ』紀伊国屋書店

³ 遠藤貴広(2015)「教員養成カリキュラム改革の批判的省察」『教師教育研究』7

⁴ D.シヨーン/柳沢昌一 三輪健二(2007)『省察的实践とは何か』鳳書房

⁵ 牛山榮世他(1989)『生活科への道』信濃教育出版

⁶ F.コルトハーヘン/武田信子(2010)『教師教育学』学文社

⁷ V.マネン(1977)の3つ(技術的・実践的・批判的)の省察レベル

これまで集積した生活科及び総合的な学習の複数の実践資料（授業記録・教師の日記）について、省察内容から省察レベル)に抽出分類して、その深化過程の分析から、教師の「観」の転回を促す批判的省察が起動する条件及び導出する方法を明らかにする。

省察的思考がどのような条件によって醸成されるかを明らかにする。

指導者としてかかわる複数の授業実践への長期にわたる協働的支援を通して、授業の予想外の事態における教師の省察の質的変容に注目して、個々の教師の文脈に沿った自律的な思考(省察的思考)が醸成される条件と要因があるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、文献資料調査、実践資料調査、臨床研究に分けてすすめた。

長野県師範学校附属小学校「研究学級」の系譜にある実践資料について、デューイ及びシヨーンの論考を軸に省察的実践の視点から分析し、思想的枠組及び時間軸での展開を考察する。集積した生活科・総合的な学習の省察記録の調査から、教師の「観」の転回場面を抽出分析し、省察レベルの深化過程の分析から省察を質的に深化させる方法について考察する。

指導者としてかかわる実践への協働的支援の具体を通して、省察的思考の醸成条件及び教師の省察の質的変容が及ぼす学習効果について、事例相互の比較検討から考察する。

4. 研究成果

「研究学級」の系譜にある実践の思想性の検討 -目的2- について-

(1) 「研究学級」及びその系譜にある実践について

大正期から昭和20年代にかけての長野県師範学校男子部附属小学校(以下、長野男子附小)における「総合学習」に関わる史料を収集・整理した上で、分析を行った。分析した資料は、(A)「研究学級」の担当教師と指導者の著作・論文、(B)国民学校期の総合授業に関わる研究記録、関わった担当教師と指導者の著作・論文、(C)戦後初期の低学年社会科、総合授業に関わる研究記録、関わった教師による著作・論文である。これら史料の分析を通して、明らかになったことは次の点である。

長野男子附小における所謂「総合学習」とは、大正期の「研究学級」、国民学校期の低学年(第1学年の1クラス)総合授業、戦後初期の低学年(第1,2学年)社会科、1948年以降に低学年社会科を総合授業化した取り組みが該当することが明らかになった。

大正期から昭和20年代の長野男子附小における「総合学習」は「児童の発達」を捉えての指導であったことは共通している。しかし、「研究学級」以外は、その時々教育が目指す目的があつての「総合」であり、教育内容や方法において性格が異なる。したがって、そこに関わる教師の「観」は、時々「総合」の性格に合わせて異なることも確認できた。

(2) デューイにおける「省察的経験」と教師の省察的実践

長野県師範学校における「研究学級」の系譜を継ぐ信州大学教育学部附属長野小学校での実践をめぐる原理的検討の枠組みとして、同系譜の実践者らが、大正年間より理論的支柱のひとつとして読み続けてきた米国の教育哲学者ジョン・デューイの著作に含意される観点の抽出を試みた。以下、本研究課題(特に教師の省察との関わり)と深く関連すると思われる観点の検討の過程の概要は以下の通りである。

「省察的経験」について、デューイの『民主主義と教育』第11章「経験と思考」から検討して、参照するのが有効であると考えた。この検討を通して、「省察的経験」は、不確定な状況から出発し、その状況を構成する要素や関係がより確定的なものとなるよう転化を試みながら、不確定な状況へと関わり続ける「探究」の過程を特徴づける思考-実践の様態であると考えられることができる。教育現場における「省察」について、シヨーンが問題視する(教師の)「不確定」な状況と、デューイの定義づける(子どもの)「探究」との相互関連は、「省察的経験」を補助線と

して、こうしたかたちで確認されると考える。また「省察的経験」は(「試行錯誤的水準の経験」とは区別され得るものでありながらも)決して、絶対的・最終的・究極的な見通し・見立てを提供するものではない。むしろ、「省察的経験」は、よく練られた仮説でもって、さらなる試験的取り組みに挑むことを促すものである。そしてこのことは、本研究の問題関心である教師の省察へも、原理的な視座を与えるように思われる。シヨーンは、プロフェッショナル「省察」の特質として、「行為の中の省察 (reflection-in-action)」を指摘した。もし先にみたようにデューイの「省察的経験」が、不確定な状況への試みから出発し、またそうした状況を転化しつつ試験的仮説でもって試み続けることにおいて特徴づけられるとするならば、そうした意味における省察は、試みるという行為を常に含み込んでいることになる。この「省察の中の行為」との視点には、教師の省察について、どのような示唆が含意されると考えられるのか。引き続き検討したい。

省察的实践における教師の「観」の転回について - 目的2 - について -

(1) 実践資料の調査及び実践への協働的支援を通じた分析検討

これまでに集積した生活科及び総合的な学習の実践記録及び実践の実際計9事例について、教師の省察内容からマネン(1991)の示す3つの省察レベルに抽出分類し、省察レベルの深化過程の分析に基づき、実践的及び批判的省察が起動する条件について考察した。

以下、5つの事例についての考察の概要について記す。

a. M 講師 (A 小学校・6 学年) の事例

国語の文学作品の学習における省察を通して、指導の転回により子どもの学習への取り組み(個の考えの深まり, 相互のかかわり)の様相に変化が見られ, 更には総合的な学習の時間の活動に波及が見られた。この実践を通して, 省察によって促される教師の「観」の転回は, 一教科の実践の深まりにとどまらず, 教科学習, 学校生活全般にわたって影響を与えることが明らかになった。⁸

b. T 教諭 (I 小学校・1 ~ 3 学年) の事例

3年間にわたるアヒル飼育の活動の省察記録及び実践支援を通して, 特に雛の誕生をめぐる予想外の展開の中で, 教師の問いの深まりと共に子どもの生命に対する思いの深まりの関係をみることができた。この実践において, 予想外の事態において判断が求められる状況が, 省察の深化につながる可能性を示唆していると捉えた。

c. K 教諭 (I 小学校・1 ~ 3 学年) の事例

年間を通じた学校近くの森を拠点に遊びを深めていく活動を通して, 当初の省察では, 教師の計画を如何に実現するか, 技術的な省察を繰り返していたが, 1学年の途中から子どもの活動の中に教師が入って共遊ぶ姿が見られるようになり, 新たな子どもの姿の発見, また子どもの感情に共感する省察記録が記されるようになり, それに伴い子どもの自発的な行動や判断が学校生活全般に様々な場面で見られるようになった。⁹

d. S 教諭 (I 小学校・4 ~ 6 学年) の事例

2年半にわたる和太鼓の活動で, 活動当初から4学年 終わりまで S教諭の省察は, 活動の概要を記すにとどまり, 子どもたちの活動での演奏や表情, 学習記録等から意欲的な姿を見ることはできなかった。その後, 申請者との懇談等を経て, 省察で S教諭の自身が物事に意欲的に取り組めない学生時代の経験を吐露し綴ったことをきっかけに, 継続して省察記録を記し続けた。その中で技術的省察から実践的・批判的省察への質的

⁸ 畔上一康 (2019) 『省察的实践を通じた教師の「観」の転回と子どもの学び』, 考える子ども, 第 393 号

⁹ 畔上一康 (2019) 『伊那小学校の実践が問いかけること』伊那小学校研究紀要 40 集

な変化が見られ、子どもたちの活動する姿もまた大きく変化していった。¹⁰

e. N 教諭（K 小学校・4 学年）の事例

一年間、総合的な学習で、現在は途絶えているが、地域に焼き物づくりが行われていたことを知ったことを切っ掛けに、調査活動をすすめ、粘土と釉薬を採掘して、試行錯誤を繰り返しながら地域ならではの焼き物づくりに取り組んだ事例である。この中で、教師自身が材の魅力を見出し、子どもと共に探究する過程が省察の中に見ることができる。この事例では、教師自身が解を持たない未知の材を探究する事態（状況）が、教師の省察を深める場となると捉えた。

(2) **省察的实践における教師の「観」の転回 - 総合考察 -**

a. 実践場面においてどのような省察を通して教師の「観」が転回するか。

これまで集積した生活科及び総合的な学習の複数の実践資料（授業記録・教師の日記）及び実践の実際について分析検討して、以下の点が示唆されたと考える。¹¹

実践における省察は、技術的省察を繰り返す中では、授業構想をそのままに実現していく点では機能するが、子どもの発意が生かされ子どもの文脈の中で学習を展開することは難しく、また子どもと教師の関係性の改善には至りにくいと捉えた。

学習過程において、子どもの事実に即して、その事実に意味を見出し構想が随時再構成されるためには、実践的省察ときに自身の在り方を問う批判的省察が教師の「観」の転回を促す上で重要な機能を果たしていくと捉えた。

本研究においては、生活科・総合的な学習の実践を主たる分析対象としたが、実践を通して教師の「観」の転回によって、教師の子どもへのアプローチの変容、子どもにとっての教師像の変容が促され、授業の根本的な改善につながると捉えられた。

b. 省察的思考はどのような条件によって醸成され深化するか。

複数の授業実践への長期にわたる協働的支援を通して、個々の教師の文脈に沿った自律的な思考(省察的思考)が醸成される条件(授業構造)と要因(働きかけ)を以下のように捉えた。

教師の省察的思考は、予想外の事態に直面したときに起動し、その思考によって構想が子どもの事実に即して再構成されていく。この再構成にあたっては、構想段階で、材の価値を軸に複線的な構想をもつことによって、予想外を不都合な事柄として回避するのではなく、その事実に意味を見出しながら随時再構成していく柔軟な思考が起動展開していくと捉えた。省察の条件としては、記録は一人称で主観的な表記がむしろ内省を深いものにしていく。またそうした日常的な試みの中で、記録に留まらず、子どもの事実に意味を見出し、授業中の刹那的判断（省察的思考）を生成していくことにつながると捉えた。

課題と今後の研究について

本研究では、実践者の授業後の省察記録を分析対象として検討してきたが、授業実践においては、授業中の省察的思考の起動と展開が如何にあるかが極めて重要なものであると捉えた。この起動と展開は、材をめぐる子どもと教師、子ども相互、また子ども自身の対話の場が如何に生成されるかに影響されるのではないかと捉え、本研究に引き続き「バフチンの対話的授業論に基づく省察概念の再考による授業実践モデルの開発」¹²をテーマに研究をすすめたいと考えている。

¹⁰ 畔上一康（2020）『過去に迎える教育 未来を編む教育』伊那小学校研究紀要 41 集

¹¹ 畔上一康（2019）『生活科・総合 その学びのゆくえ -教師の観と子どもの学び-』教育創造 191

¹² 科研費基盤研究(C)課題番号 21K02574（2021～2023 年度）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 畔上一康	4. 巻 191
2. 論文標題 生活科・総合 その学びのゆくえ -教師の観と子どもの学び-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育創造	6. 最初と最後の頁 pp10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 畔上一康 宮島新 吉澤裕一
2. 発表標題 教師の『観』の転回を促す省察的实践に関する研究 -教師の『観』の自覚化と子どもの学びの深化-
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畔上一康 宮島新
2. 発表標題 生活科及び総合的な学習における省察的实践に関する研究 -授業展開と教師のリヴォイシングに着目して
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 畔上一康
2. 発表標題 生活科・総合的な学習における省察的实践に関する研究 - 教師の成長の視点から『観』の転回に着目して -
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 畔上一康
2. 発表標題 教師の「観」の転回を促す省察的实践に関する研究 文学作品の読みを通して
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 畔上一康 宮島新
2. 発表標題 生活科及び総合的な学習における省察的实践に関する研究 授業展開と教師のリヴォイシングに着目して -
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤森 裕治 (Hujimori Yuji) (00313817)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	
研究分担者	高柳 充利 (Takayanagi Mitutoshi) (60575877)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	
研究分担者	篠崎 正典 (Shinozaki Masanori) (80705038)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------